

司式: 佃 雅之
奏楽: 堀口恵美

前奏: 「み神より離れまつらじ」(J.S. バッハ)

招詞: 主に望をおく人は新たな力を得 驚のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。(イザ40:31)

讃美歌 206「七日の旅路」

交読詩編 122 編

- 01 【都に上る歌。ダビデの詩。】主の家にこう、と人々が言ったときわたしはうれしかった。
- 02 エルサレムよ、あなたの城門の中にわたしたちの足は立っている。
- 03 エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い
- 04 そこに、すべての部族、主の部族は上って来る。主の御名に感謝をささげるのはイスラエルの定め。
- 05 そこにこそ、裁きの王座が/ダビデの家の王座が据えられている。
- 06 エルサレムの平和を求めよう。「あなたを愛する人々に平安があるように。」
- 07 あなたの城壁のうちに平和があるように。あなたの城郭のうちに平安があるように。」
- 08 わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。「あなたのうちに平和があるように。」
- 09 わたしは願おう/わたしたちの神、主の家のために。「あなたに幸いがあるように。」

朗読聖書①エレミヤ書 1:4-10

◆エレミヤの召命

- 04 主の言葉がわたしに臨んだ。
- 05 「わたしはあなたを母の胎内に造る前から/あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に/わたしはあなたを聖別し/諸国民の預言者として立てた。」
- 06 わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ/わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」
- 07 しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ/遣わそうとも、行って/わたしが命じることをすべて語れ。
- 08 彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて/必ず救い出す」と主は言われた。
- 09 主は手を伸ばして、わたしの口に触れ/主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口に/わたしの言葉を授ける。
- 10 見よ、今日、あなたに/諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し/あるいは建て、植えるために。」

朗読聖書②ルカによる福音書 9:1-9

◆十二人を派遣する

- 01 イエスは十二人を呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。
- 02 そして、神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わすにあたり、
- 03 次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。
- 04 どこかの家に入ったら、そこにどどまって、その家から旅立ちなさい。
- 05 だれもあなたがたを迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落とさなさい。」
- 06 十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした。

◆ヘロデ、戸惑う

- 07 ところで、領主ヘロデは、これらの出来事をすべて聞いて戸惑った。というのは、イエスについて、「ヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言う人もいれば、
- 08 「エリヤが現れたのだ」と言う人もいて、更に、「だれか昔の預言者が生き返ったのだ」と言う人もいたからである。
- 09 しかし、ヘロデは言った。「ヨハネなら、わたしが首をはねた。いったい、何者だろう。耳に入ってくるこんなうわさの主は。」そして、イエスに会ってみたいと思った。

祈祷

天地の創造主にして全能なる生ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。この主の日の朝、あなたが私たちを教会へと招いてくださり、またライヴ配信によって共に礼拝する時を与えてくださいましたことを心から感謝致します。私たち一人ひとりが、あなたに選んでいただき、御子イエス・キリストによって結ばれた者として、心を合わせ、声を合わせて、あなたを賛美し、あなたの御栄光を顕すことが出来ますように。

私たちの主よ、あなたは私たちの弱さや愚かさをよくご存じです。時として私たちは、この世の様々な誘惑に心を奪われ、あなたを忘れ、あなたから遠ざかることがあります。けれどもあなたは、私たちをお見捨てにはならず、決して離さず、御子イエス・キリストを通して繰り返し私たちの名を呼び、教え、導いてくださいます。主よ、どうか、私たちにこの世の誘惑に打ち勝つ力を与えてください。私たちが、御子が十字架で流された血潮によって既に贖われた者であることを思い起こさせてください。キリストを私たちの内に宿し、言葉と行いによってキリストに倣って生きる者としてください。あなたを愛し、隣人を愛し、私たちが決して高ぶることなく、自分を誇ることなく、何時も舌を制御して、易しい言葉、配慮に満ちた言葉を語ることが出来ますように。謙虚な思いと寛容な心をもって日々を歩む者とならせてください。

愛に満ち給う主よ、どうか地上に平和を来たらせてください。私たちが戦争によって傷つけられた方々の呻きに、平和を求める声無き声に、そしてまた、新たな戦争の兆しに対して、常に耳を澄まし、敏感な眼差しを向けることが出来るようにしてください。神を神とせず生きることが無知であり、隣人を自分のように愛さず、自分の願いと思えばかりを優先して生きることが罪であることを、この朝すべての者に教えてください。真の平和は、あなたの愛によってのみ実現されるということを私たちが覚えることが出来ますように、主よ、どうか私たちをあなたの平和の御支配のために用いてください。

憐れみ深き主よ、悩みの中にある者を顧みてください。病床にある者、またその介護のため、そして高齢のために疲れを覚え、あなたの御用のために働きたくても働けない者が居ります。愛する人を亡くし、寂しさの中にある者が居ります。どうかあなたのお支えを必要としています私たちの愛する友に、あなたが直接慰めと癒しと励ましを与えてください。

神さま、今、私たちの暮らすこの国では、地震により、また台風、豪雨による水害により、日々の生活に困難に遭って希望を失っているものが数多くおります。あなたの御業こそが必要です。主よ、被災地の教会を励まし、あなたの御声を大きなものとしてください。キリストの名によって立てられた全ての教会を、あなたの恵みと希望を証しする教会として堅く立たせてくださいますようお願い致します。

主よ、今日の説教者を感謝致します。鮎川健一牧師が聖霊の導きを豊か

に受けて、あなたの御言葉の説き明かしが為されますように。聴く私たちも聖霊に導かれて、心と思いを開くことが出来ますように。あなたがこの礼拝の真の主権者としてこの所に共に臨んでください。

これらの祈りを、主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 517「神の民よ」

説教「派遣される者」

鮎川健一

夏の日差しの残る中で9月の新たな歩みと共に、心の内にある信仰を見つめ直し、志を新たに、今朝の御言葉から、キリストを証しする者への励ましと同時に、宣教の核心を知らされます。

主イエスは12人の弟子たちを遣わされました。ここには主の復活の後、世界へと遣わされる時の全てが既にありました。弟子たちは、当初は「派遣」というものを明確に理解していなかったと思われそうですが、後に思い返して、その意味が分かったことと思います。主が弟子たちを遣わすに当たり、二つの力を授けました。一つは「力と権能」、もう一つは“伝道者の心得”ともなるものです。まずは「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能」が与えられました。元は“主の力”です。弟子たちに対しては、主の代理者として遣わされたものです。彼らは主に代わって悪霊を追い出し、病気をいやす、神の国を宣べ伝える者として遣わされました。この“主イエスに代わって”ということが重要です。弟子たちは、イエスが真の王であり、真の神であられることを証しする者として遣わされています。それは自分たちの手柄を獲得し評価されるためではなく、“主の御業”とされるものです。そのため彼らには相当な覚悟を強いるものでした。それも当然に思います。自分には無い力を与えられ、悪霊を追い出し、人々を癒し、福音を宣べ伝えていく困難にぶつかり、そこで、姿は見えずとも常に主が共におられ、自分と共に働いて、宣教の業に用いられていることを思わされたからです。この経験こそが重要です。

キリストの教会は、この時の弟子たちと同様に、キリストの代理者として立てられてもいます。そのため、罪の赦しの洗礼を行うことが委託され、キリストの御臨在を示す聖餐を執り行うことが可能とされています。しかし大元は主イエス・キリストの業によってなされているということです。それにより、教会はキリストが共に生きて働いて下さっている、ということを知られ続けてきました。これを信じ守り続けることによって、教会は教会であり続けてきたのです。教会が教会となるために、栄光は主にあるのみです。

主は弟子たちに「力と権能」をお与えになりましたが、弟子たちが心得ることを三つ示されました。第一に“旅には何も持っていない”こと、第二に“一つの家にとどまる”こと、第三に“自分を迎えない町からは足の埃を払い落として出ていく”ということです。歴史も世界も異なる聖書のこの記述から、現代の世界・日本に当てはめると福音の使信が見えなくなりもします。ここでは第一のことが最も重要です。「杖、袋、パン、カネ、下着」というのは当時の旅の必需品です。当時のユダヤでは、徒歩での移動が一般的ですから、必要最小限のものは必要です。それでも主は“持っていくな”と釘を刺しました。それはこの旅が行楽地への休暇旅行ではなく、“神の国、神の御支配を宣べ伝える旅”であること、“神の力、神の御教え、何よりも神が共におられることを示す”ためだったからです。しかしそうは言っても実際問題として、生き

るか死ぬかの瀬戸際の課題には、心配事の多くに将来のことが浮かび、日常生活をどう備えるか気がかりになるものです。現代社会の混乱や先の見えない状況を受けるなら、むしろ何も持たずに考えないで生きる方が無鉄砲・無謀です。反対に究極的には、この世の贅沢や楽しみ、人々の評価や地位獲得を心の大きな支えや生き甲斐に置かなければ、どこに生きようと、どんな苦勞があろうとも主の御支配を信じて歩み続けられる。現実的には非常に心苦しいことですが、主は『山上の説教』の中で、こう伝えました。「神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。その日の苦勞は、その日だけで十分である」(マタ 6:33,34)と。主が養ってくださることを覚えるならば、何もしないで過ごすのではなく、“夫々の持ち場、立場において出来得る限りのことを行い、主に応えてゆけばよい”こととなります。

次の心得の、「どこかの家に入ったら、そこにどどまって、その家から旅立ちなさい。」ということですが、これも第一の心得と重なります。弟子たちの業のために、彼らを招いて家に泊めてくれる人が現れます。しかし豊かな家とは限りません。雨風を凌ぐのがやつのこともあるでしょう。それでも“待遇の良し悪しを求めて渡り歩くな”ということです。“あなた方は主の養いに生きるのであって、この世の報酬を求めて宣教しているのではないから”ということです。確かにそうでしょう。しかし先の、旅に出る時のように最低限必要なものはありますから、これも最低限あつてしかるべき報酬が無ければ、霞を食べて生きることは誰しもが出来ないわけです。殊に現代社会の中にある教会では、この取り違えが大きな問題にもなっています。

第三の心得は分かり難いものです。「足についた埃(塵)を払い落とす」、これはユダヤの風習から考えると、“私とあなたとは関係ない”という意思表示です。私が高校卒業してから様々な教派の友人や教会と出会ってきた、多くの経験の中で——青年のグループであったから——、行った先々の町で待遇のよくない店や態度の悪い店員に出会った時に、このことを思い起こしながら、冗談半分で“足のチリを払って行こう。こんな所、二度と来るもんか!”と店先で笑い話になったものでした。そこで隣にいた生真面目な女子学生が見ていて、私たちに向かって“何て失礼な!”と憤慨したのです。実際、主はどういうことからこのことを伝えたのかと思うわけですが、私自身がこれまでに自他ともにあった出来事を思い返すとよく分かります。大半の伝道者は『伝道の成果』が見えないと自分の非力を責めますし、またそのことを他人から責められます。“伝道の成果”と表現すること自体が的外れですが、敢えて言いますと、“新来会者がいない、受洗者が興されない、会員が増えない”などから、“自分は牧師に向いていない”と思い始め、またそのことを他人からも言われます。それが続けば牧師職から遠のき、宗教すら乗り換えることもあります。また反対に、人に好かれるように聖書の本筋から離れて厳しいことは言わず、他人よりも高く評価してもらえらる牧師であろうと努力するという、考えられないことだが必死に努力する。伝道は神の御業です。人の経験や能力でその人のすべてが評価されるようなこの世の働きとは根幹から異なります。伝道者であるならば、そのことは百も承知のはずです。信徒も“然り”でしょう。しかし現実的には教会の名前や牧師の評価が大きく現れ、牧師も信徒もその測りによって他人を利用し、何とかして教会に人を増やし、自分の成果や評価を得ようと努力する。まったく筋違いなことをしているのが散見します。

そこで主の弟子たちに注目しますと、彼らの行く所々で、いつも大歓迎されたとは言えなかったでしょう。ユダヤの古来からある宗教の風習や慣

習が既にあるところに、また異邦人の土地に入って見たことも聞いたこともない神の教えを伝えるのですから、むしろ気苦労や人々からの攻撃が絶えなかったことは、私も信徒・神学生・牧師生活では日常であり、身に染みて分かります。また彼らの苦労も見えてきます。重ねて使徒パウロの宣教旅行を見ますと、ルカは使徒言行録にて詳細にそのことを伝えていますが、ステファノや使徒パウロの困難さが十二分に分かります。そのことは、現代の日本の教会に大きな支えになっています。主はそのことも初めからご存知だったのです。そこでこう告げます。5節です。「誰もあなた方を迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落とさない。」と。主は、「真実をもって主の証しをなすあなたの業も言葉も受け入れられないとしても、それは受け入れない人の責任と問題で、あなたの責任ではない」ということを伝えているわけです。これはもちろん、先のような態度姿勢を持つような伝道者自身に問題があることも否定できません。宣教は神の業、神から委託され用いられて為される最も責任ある職務です。「わきまえた行動をしないで」ということです。日本の教会の中に常に起こる過ちでもあり、世界にもこのことが及んでいます。これ以上は時間もありませんので、言及は別の機会としますが。

主は釘を刺すように弟子たちに“伝道の心得”を伝え、「力と権能」を与えて弟子たちを遣わされました。「わたしに従う者になりなさい。」(マタ 8:22)と言って彼らを召し集められました。私たちは毎週ここに集まり礼拝を献げています。前奏をもって礼拝を始め、祝祷を受けて教会から派遣されて行きます。決して各自の思う所へ行くのではなく、主なる神によって遣わされて行きます。家庭であれ、学校であれ、職場であれ、牧師も含めて“キリストの恵みを告げ、神の御支配と守りとを証しする者として遣わされて行く”のです。教会から遣わされずして宣教の業は起こされません。教会の中に留まっていたは、あの弟子たちが、主の十字架を見て怯えて家に閉じこもっていたあの時と同じです。この礼拝の中心にあるのは教会の建物やオルガンや説教台ではなく、御言葉です。主の御言葉において私たちは遣わされた者として生きるために必要な養いを与えられます。主の弟子たちは主によって遣わされるまで、主の言葉に聞き、主の御業を間近で見えてきました。その養いが十分にあって初めて遣わされていくことが出来たのでしょうか。“私たちは主の御言葉に聞く者です”。もう一度言います。“私たちは主の御言葉に聞く者です”。“自分を不動のもの中心にして主の言葉を聞くのではない”のです。もう一度言います。“自分を不動のもの中心にして主の言葉を聞くのではない”のです。主によって養われるのですから、主が主体です。

キリストの福音は、遣わされた者の証しに教会の命がかかっています。教会が礼拝や伝道集会を守っていれば安心安全ではなく、“主の養いに生きる”という、この或る意味、大逆転の出来事、大逆転劇の中にある一人ひとりの出来事が、主の御支配に生きる真の幸いの生活として周囲の人々を驚かせ、神の国への関心となり、私たちの証しを通してキリストへと人々を招いていくのです。

初めに福音書と同時に『エレミヤ書』1章から御言葉を聞きました。エレミヤは、「自分は預言者として、神に遣わされるには、ふさわしくない。自分には言葉がない、若すぎる。」と言います。しかし神は「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける」と告げられます。多くは、“神に遣わされた者として生きよ”と言われれば尻込みもしたくなります。実際そうです。しかし神は言われます。「行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、

必ず救い出す」と。ここに「わたしが共にいて」とあります。主なる神が先立って“わたしが共にいて、あなたを用いるのだ”と言われるのです。主に遣わされた者として生きるとは、各自の責任を持ちつつ主の御業の道具とされて生きることです。まさに“神に栄光あれ”と告白し、私たちはここから遣わされていきます。困難絶えない、またキリストを知らない世界に、悪の闇が深くあるこの世界に、真の光、命の源なる主イエス・キリストを高く掲げる者としてあるように、心から祈りつつ遣わされて参りたいと願います。

共に祈りを献げましょう

憐れみ深き父なる御神さま、恵みの内に加えてくださり感謝致します。しかし、多くの恵みに与りながらも、時に、あなたが遠くに感じられることがあります。しかし、どうか、共に居まして救いへと導いてくださる信仰へと引き戻してくださいますように。そして、あなたに全てを寄せて、拠り頼む者を、義しき道に導いてください。そして救い主の恵みに生かされ、内にこもる自己中心、また貪り、愛のない心が力を揮うことなく、日々の生活の中でキリストの愛にある証しが為されますように。

暑さも尚続くこの時、弱き魂を主の御力によって再び立ち上がらせてください。全ての御手に委ね、尊き主イエス・キリストの御名によって、御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌 405「すべての人に」

献金・感謝・主の祈り (海保真砂子)

聖なる父なる御神さま、9月の第2聖日、聖霊降臨節第17主日のこの朝、あなたによってこの御堂に、そしてライブ配信で礼拝に与る恵みが与えられましたことを心から感謝致します。

講壇を通して豊かに御言葉の説き明かしを受けました。私たち一人ひとりには信仰が弱く、薄い者たちです。けれどもあなたは、私たち一人ひとりの名を呼んで、伝道の業に励むようにと勧めておられます。伝道の業の困難さ、苦しさを覚えつつも、それでもあなたが私たち一人ひとりを呼んでくださっていることを覚えて、日々の務めに励むことが出来ますように私たち一人ひとりを強め、そしてこの群れを導いてくださいますようにと切に祈ります。

私たちは必要なものをあなたから与えられています。その中から感謝と献身の徴として献金をお献げしました。どうぞ聖めて、あなたの御用のために用いてください。

あなたが教えてくださいました「主の祈り」を共に祈り、新しい日々を力強く歩ませてください。「主の祈り」…アーメン。

讚美歌：89「共にいてください」

派遣・祝福：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：《週報記載の通り》

後奏：「み神より離れまつらじ」(D. ブクステフーデ)